

四五六会のこと



志^し村^{むら}有^く弘^{ひろ}
(相模女子大学名誉教授)

ずっと長いあいだ、頭の中に記憶されていた。薄暗い旅館で二十人くらいの生徒とザコ寝の形で宿泊していた。部屋の明かりが消されていたものか、生徒引率の緊張感で夜が明けるまで眠ることができずにいたものか、薄暗さだけがぼんやりと記憶に残っている。場所は高崎市。何をしに高崎へ行き、宿泊したものか。どうしても思い出すことができない。全員でその部屋に泊まり、部屋の薄暗さだけが脳裏に残っていた。

私は、埼玉県の私立高校（立教高校）に非常勤講師で一年、専任で四年

間勤務した。専任の一年間はバスケットボール部の部付となり、二年目からは空手部の部長となった。私は柔道を少し齧ったものの、空手のことは何も知らない。それでもとにかく部長にさせられた。

塩原温泉での一週間くらいの空手部合宿にも参加した。旅館の名前も忘れてしまったが、生徒たちは玄関脇の二部屋に泊まり、私にはそこからそれなりの距離があるコンクリートの階段を登って行く離れのような部屋をあてがわれていた。それでもその離れの建物には、小さな温泉の風呂もあり、本を

読んだりするにはありがたい場所であった。しかし、どこで食事をしたものかは、まるで記憶がない。

合宿が終わり、バスで宇都宮駅に向かうとき、なかなかバスが来ない。私が「遅いなあ」とつぶやいた。それを聞きつけた三年生が「おい、牛窪！早くバスを連れてこい」と一年生に命令している。すると牛窪君は、「はい、はい」と応えて、バスが来る方向へ駆け出す。むろん、すぐに戻ってくるのだが、そういう演技をする一年生、そういう無茶を言ってみる三年生。こうしたことも懐かしい思い出である。明

朗で、楽しい仲間たちであった。牛窪さんは今、沖繩で教壇に立っているという。

私がその高校を退職したのは昭和四十六年三月。私と共に卒業した学年の空手部々員は、青井雅美・天野豊・岩田好伯・小松原雅弘・品田豊・関谷吉住・田代龍介・当麻誠・菱谷勝・平野好邦・松永徹夫・三海光雄・山本信英君ら十三人。みんなそれぞれ自分の思う道に進んでいった。

長い歳月が流れた。突然、青井・岩田・菱谷三氏から連絡があり、昭和四十五年・六年卒業の空手部員が集まって親睦会を開くので出席しろ、という。そうして彼等が進学した大学が池袋にあるからか、ここ七、八年のあいだに池袋で親睦会が三度開かれた。二度目までは「やあ、やあ」という感じの親睦会、三度目は木澤克之さんが最高裁判事に就任（平成二十八年七月）することになり、彼を囲むお祝いの会であった。これらの親睦会で、私は青井さんら昭和四十六年卒業の人た

ちだけでなく、一学年上の小倉哲也・木澤克之・野村秀夫・増田真一の四氏とも親しく言葉を交わす機会を得た。私はこの親睦会を勝手に四五六会と名付けている。その間、関谷君が病のため、他界したのは無念の極みであった。

初めての親睦会のおり、私は木澤さんから「空手の関東大会が高崎で開かれるが参加するべきだと（志村から）言われ、参加して型の部で優勝した」ということを聞かされた。彼等は初めて試合なるものに参加して優勝した。

野村さんは「あのおりの優勝が心に深く残っている」と話していた。記憶が悪くて空手部のみなさんには申し訳ないことであるが、旅館の薄暗い記憶は、彼等と共に出かけた空手の関東大会であったことが木澤さんの話から明らかになった。

木澤さんと再会したとき、彼は弁護士の名刺を渡してくれた。高校時代の木澤さんは常に冷静で、毅然とした姿を示していた。空手着もよく似合っていた。法学部に進み、弁護士になり、

やがて最高裁の判事になる。むろん、そのこれまでには辛いこと、悲しいことが多々あったに違いない。これかも仕事の仕事であるだけに、山あり、谷ありの厳しい出来事に遭遇することもあるに相違ない。それでも、木澤さんは生来の沈着冷静、誠実な人柄で、自分の信じる道を着実に歩み進んで行くと思う。

自分の年齢が高くなってゆくと、当然、言葉を交わす人は年下になる。そして、かつて教え子であった人たちが、年と共に益々光り輝いてゆくように見えるのは、彼等がそれぞれの世界で立派な役割を演じているからである。私は彼等に何かを教えた記憶は全くない。空手部に所属していたときも、合宿や試合のおりの旅館など、全て彼等の示す通りに身を置いてきたにすぎない。振り返ってみると、私はいつも彼等に支えられていたように思う。みんな気のいい、すばらしい仲間である。

ソリュブルと名をかえた

片岡義男
(作家)



その広いスーパーマーケットの半分は奥と言つていいスペースで、そこには棚がたくさんあつた。ほどよい奥行きと幅の、高さもちょうどよい加減のおなじ棚がいくつも何列にならんでゐた。どの棚にも食料品がぎっしりと詰まつていた。その食料品のいつぼうの端がベットフードだとすると、もういつぼうの端には介護食があり、その中間にたくさんあるのは、いまのそこ

ろまだ大丈夫な人たちの、今日も今日とてこのようにある、という種類の日常を維持するためのものであり、それをそのまま未来に投影するとサステイナブル・フューチャーになるなど、とうてい無理な話だなどと思ひながら、天井から下がっている表示板に、コーヒー・紅茶、とあるところの棚の前に立ち、僕はインスタント・コーヒーを探した。

探すまでもなく、棚板を少なくともふたつは占領して、インスタント・コーヒーがならんでいた。ひとつずつ正確に数えたなら三十種類は越えていただろう。せいぜい五、六種類が棚の隅にあるのか、などと思つた僕は間違つていた。インスタント・コーヒーは売れているのだ。人々はそれを買つているのだ。買う人がいなければ売れるわけはなく、売れない商品は淘汰される運命にある。淘汰されるどころか、インスタント・コーヒーは盛んなのだ。

自分でインスタント・コーヒーを買つたことがこれまでの人生のなかで一度もなかったことに気づいて、僕は自分でインスタント・コーヒーを買つてみることにした。つい先日の夕方近く、広いスーパーマーケットの奥でインスタント・コーヒーの棚の前に立つたのは、そのような理由からだ。

どれを買えばいいのか。インスタント・コーヒーに関してまったくの初心者である僕は選ぶ基準をわかりやすい

ひとつにきめることにした。もつともわかりやすいのは、容器のサイズ、つまりなかに入っているインスタント・コーヒーの量だ。三十グラムのネスカフェ・ゴールドブレンドの四角い小さな容器を僕は手に取った。そして発見した。いつのまにかインスタント・コーヒーは、ソリュブル・コーヒーへと、その名を変えていた。ソリュブルとは、溶かすことの出来る、という意味だ。容器からスプーンですくい出し、カップに入れて湯を注いでかき混ぜれば、ソリュブル・コーヒーの出来上がりだ。

三十グラムの次は六十グラムだった。キャピタルのモカ。ガラス瓶と蓋のかたちが、それほど悪くない。モカは商品名でコーヒー豆の原産国はエチオピア、そしてキャピタルは販売者で原産国はスイスだ。グロバルなフリーズドライではないか。

幅が十七ミリで長さが一二〇ミリという細長い紙袋に二グラム入ったものが二十五本、ボール紙の箱入りになっ

ているものも、僕は選んだ。高地有機栽培のアラビカ豆一〇〇パーセントのブレンド・コーヒーのフリーズド・ドライ。ブレンドとは、この場合は、パプアニューギニア、ペルー、メキシコの三つだ。袋の一端を破いてなかのものをカップに入れ、湯を注いでかき混ぜればそれでいいのは、他のすべてのインスタント・コーヒーとオナジダ。日本語ではカフェンレスと呼ばれる、デイカフェネイテッドだ。マウンント・ハーゲンというブランド名で、ドイツの製品だ。ひと袋に一五〇ccの湯が最適だそうだ。

この三種類を僕はそのスーパーマーケットで購入した。店の自動ガラス・ドアを出ながら僕が思ったのは、棚にある全種類のインスタント・コーヒーを買って試しに飲んでみることに、どれだけの意義を認めることが出来るか、という問題についてだった。

すぐ近くの別の店で、エスプレッソのインスタント・コーヒーを、可愛らしいひと箱、買ってみた。イタリー製

で豆はブラジルその他だという。ひと袋に一・六グラム入っていて、お湯の適量は七十ccだそう。これを買って、すでに三種類のインスタント・コーヒーの入っている袋に加えたところで、僕はひとつ思いついた。

二〇〇ccほどのサーモスに熱い湯を入れ、袋に入ったインスタント・コーヒーを四つか五つ、紙コップとともに鞆に入れ、新幹線にたとえば新横浜から乗ったとして、富士吉田あたりで最初の一杯を作って飲むのは、ほど良い酔狂として、試みる価値は充分にあるのではないか。一分刻み、という言いかたがけっして誇張ではないような、急がなくてはきけてい、したがって忙しい朝の時間に、かろうじて一杯だけ飲んでもらえるのがインスタント・コーヒーの常態だとするのなら、そこから遠く離れて西へひた走る新幹線のなかで座席に身をゆだねてぼんやりしているような時間にこそ、インスタント・コーヒーの真価はあらわになるのではないか。

「大木惇夫詩全集」全三巻を読む

宮地 智子
(詩人)



昭和四十四年、金園社発行の復刻版を最近になって入手した。第一巻の冒頭、北原白秋による序文で紹介され、讚えられた詩、「風・光・木の葉」こそは、大木作品のすべてに底流する、通奏低音であり、原点になる一篇であることは、全三巻を読み終えた私にとつて、深い感動とともに思い知らされることである。

風・光・木の葉

一すじの草にも

われはすがらむ、

風のごとく。

かほそき蜘蛛の線にも

われはかからむ、
木の葉のごとく。

蜻蛉あきつのうすき羽にも
われは透き入らむ、
光のごとく。

風、光、
木の葉とならむ、
心むなしく。

さて、第二巻の冒頭の詩集『海ばらにありて歌へる』は、昭和十六年、大東亜戦争が始まって後、ジャワ作戦に徴用された際に現地インドネシアで出版されたものである。

この、ジャワ作戦の司令官は、今村均中将（後に大将）であり、『今村均大将回想録』中には、この戦いが、白人による植民地からの解放を目的とするためのものであることが明確に記されている。実際、インドネシア人たちは、日本軍に協力的であり、またたぐ間に日本はオランダ軍に勝利してしまった。今村中将による軍政では、インドネシア民族の音楽好きを尊重し、日・イ両民族融和のための歌を、日・イ両方から懸賞募集するなどして誠に和やかであった。その選者を、大木惇夫が歌詞の部門で担当している。曲の方は、作曲家の飯田信夫と軍楽隊長とで担当した。当選した歌は発表会の席



日本酒がますます恋しくなる冬。

その味をさらにおいしくさせる

器を見つけた。

讃岐漆器・五技法の二つ「後藤塗」で

生まれた器たち。

自慢の料理は重箱の中。

香川に伝わる伝統工芸品

後藤塗

(ごとうぬり)

さびぞうこく
錆象谷の技法で施した滑り止め、

ひとしずくも無駄にしない注ぎ口。

ほどよいぬくもりが手に伝わる。

思いを込めて醸した酒を、

思いを込めた器で味わう。

極上のひとときが、

最上の年を

招いてくれそうだ。



昔から殺菌作用があるという漆。
ごちそうを入れても美しい。



漆器の椀は、保温性があるのに、
外は熱くなりにくい。



宗家として五代目を継いだ後藤孝子さん。「後藤塗の大きな特徴は、塗りの技法。後藤塗は日常漆器だからこそ職人の仕事なんです」と語る。ひたむきに塗りを重ねる姿は、朱漆のように、まばゆく見えた。



刷毛で塗り、次にポンポンと細やかに叩くという作業が続く。リズムカルな音が作業場に響く。



さらに、指で幾重にもなぞる「なでごと」。そこに「後藤塗」ならではのゆるやかな起伏が生まれる。



次の漆を塗るために、ペーパーなどで「磨き」の作業が入る。完成するまでには、三ヶ月ほどかかる。





伝統の品々だけでなく、新たなデザインの菓子器やカップなど、眺めるだけでも、心に春が来るよう。



お茶人さんたちに愛されてきた「後藤塗」。店内には、茶器の逸品などが並ぶ。



創始者の後藤太平作の茶托。そのデザインは、時を経ても色あせない。

堅固なことから、日々に使い込む器としても重宝される「後藤塗」。太平翁から伝わる作風のこだわりは、「品よく、角なく、面白く」。その魂を受け継ぎ、今の暮らしに愛される「後藤塗」を生み出したと奮闘する孝子さん。その指先から、今日も美しい漆器が生まれる。

「知られるのが「宗家後藤盆」。五代目の後藤孝子さんは、高松工芸高校漆芸科を卒業後、香川県漆芸研究所研究生課程を修了、家業の「後藤塗」を学ぶ。
孝子さんは、塗りの作業が好きで、終日、作業場にこもることもあるというが、たいていは夕方から母の顔に戻る。現在は子育てをしながら、職人の顔、店主の顔と何役もこなす。

太平翁から五代目孝子さんへ
今に輝く「後藤塗」の妙技

後藤太平氏が考案したこと

から、その名前が冠されている「後

藤塗」。創設者から引き継ぐ技

を伝え、県内唯一の専門店として

知られるのが「宗家後藤盆」。五代目の

後藤孝子さんは、高松工芸高校漆芸科

を卒業後、香川県漆芸研究所研究生課

程を修了、家業の「後藤塗」を学ぶ。

孝子さんは、塗りの作業が好きで、

終日、作業場にこもることもあるというが、

たいていは夕方から母の顔に戻る。現在

は子育てをしながら、職人の顔、店主の

顔と何役もこなす。

堅固なことから、日々に使い込む器と

しても重宝される「後藤塗」。太平翁

から伝わる作風のこだわりは、「品よく、

角なく、面白く」。その魂を受け継ぎ、

今の暮らしに愛される「後藤塗」を生み

出したと奮闘する孝子さん。その指

先から、今日も美しい漆器が生まれる。



展示の品々だけでなく、引き出物や記念品など、独自に発注すれば、オリジナルの製品も手にすることができる。



で両民族の男女同数で歌われた。題名は「八重汐」。

『海原にありて歌へる』は、生命を懸けた大義を帯び、高揚感の溢れる作品集である。跋文は、浅野晃、富沢有為男、大宅壮一の三氏。ともに報道班として従軍した仲間である。作家の阿部知二もその一人である。

「遠征前夜」「戦友別盃の歌」「空と海」に続く「赤道を越ゆるの歌」は〈今ぞ過ぐ、赤道を過ぐ、／月明かる真夜のしじまに／友よ、聴け、銅鑼は響くを、／みんなみの遙けき極み／八汐路の幾日幾夜を／ひた進み、攻め寄せて来し／すめらぎの遠みいくさの／船団は壯なるかな、列なして、五重に六重に／空と水いとも聞けき／海ばらを蔽ひつくして／ああ、今ぞ赤道を過ぐ。〉を一連とする長い詩であり、三連目の後半部分は次のように結ばれている。

〈船団のいくさの構へ、／黙々と、ひた進むのみ。／灯は消して、それとわかねど／舳なる高所を見れば／ゆる

ぎなし、備ふるものの／高射砲、星に触れつつ／見張りするつはもの肩／蔽かに月を支へぬ、／鬼神だもけだしや哭かん／やまとだま、胸張りなして／ただただに言はね、語らぬ／雄叫ぶは心のひびき、／八重汐や、汐の八汐路／はろばると国を離れて／みんなみの果てにしあれど、／大君の辺に死するなり、／見はるかす大海原の／十字星つき照る波の／波の穂にわか声ありて／ああ、今ぞ赤道を過ぐ。〉

第二卷の附記に大木惇夫は敗戦直後のことについて、述べている。戦地における、あの大上段にふりかぶった刀をどうおろすのか、という或る親友のことばに對し、どのように答えていいのか困惑していると。確かに、自分は、顔から火の出るほど恥しかったが、自分としては、『海ばらにて歌へる』以後にも新聞などに依頼されて発表した作品を、そのまま削除することなく集録したのは作者としての責任を負うためであった、と。けれど最も疎

外感を味わったことは、白眼視されたものの、堂々と論難する人がひとりもなく、黙殺されたということである。

今村均大將は言う。やはり敗戦後、批判にさらされたが、そのような批判に答えるのは不愉快なことであり、ひたすら、責任者としてわが国法により処罰されたいと願うのみである。

さて第三卷は戦後に発表された作品集であるが、戦争は、いつの世にも文学作品に影をおとすものである。仏教讃歌のなかのひとつ「今の秋」を引用する。(朱の薔薇崩え朽ちて／向日葵も／うなだれて／この穢土は／塵埃霧煙／空よりも脅すものありて／ベトナムの戦ひの災殃を／いかがせん、この濁世。／国と国 人と人 人と人と 獣に操られ果てなんか。／今はただ、かさこそと鳴る落葉／吹きちらし 吹きすぎる旋風のみ、／さればこそ、み仏のみ光は／いよいよに明かるなれ、／死を期して よく生きて／凡夫われ、み仏にすぎるのみ。)

アマリリス

中西美子

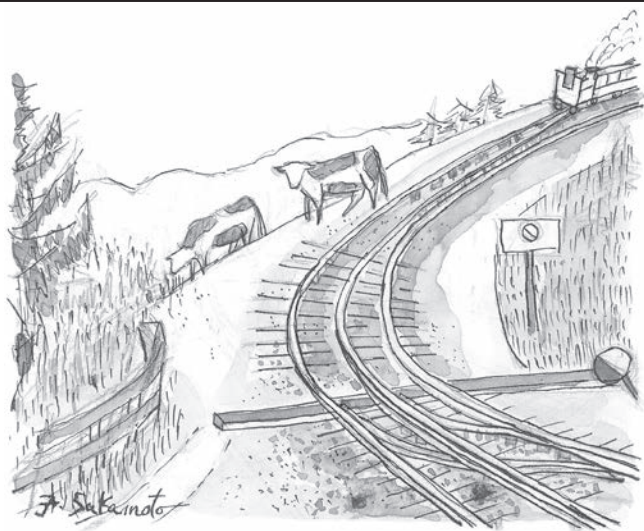


アマリリスは、ギリシャ神話の、羊飼いの少女の名前です。少女が恋した同じ羊飼いの少年は、他の少女が好きだったので、少女は、神様をお願いして手に入れた矢で自らを傷つけました。流した血から生まれたのがアマリリスでした。少年は、すばらしく美しいその花にすっかり心を奪われたというお話です。アマリリスというのは、昔から馴染みある名前なのに、長い間、君子蘭と区別もできずにいました。実際の花を知ったのは随分後だったなあと、考えていたら急に思い出しました。小学校の音楽の授業で習った単純明解な音楽「……フランス土産のオルゴール……」というフランス民謡でした。作曲したのは、ルイ一世とかで、馴染みがあったわけです。サクサク検索してみると、とんでもないことがわかりました。私が描いたのは、アマリリスではなく、ヒツペアストラムというものでした。ホンアマリリス、「アマリリスベラドンナ（ベラドンナリリー）」というものが本当の意味でのアマリリスでした。でも花屋さんでもややこしいので、全部ひっくりかえって、アマリリスとして売っているようです。どちらもヒガンバナ科であり、同じ扱いだったのが、研究が進んで別物になったようです。確かに雄蕊の形や花の咲き方など大きな違いがあるそうです。現代ではヒツペアストラムのほうが圧倒的に多く流通しています。本当のアマリリスは、ほとんど店頭には並ばないそうです。

ザルツカンマングートの旅して

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター



今年六月にウィーンを訪れた。今回は展覧会がなかったので旅行目的だ。

昨今難民問題でヨーロッパは揺れている。いろんなことに遭遇するのかなと思って、一応は十分気をつけて行動をしていた。しかし表面上は例年と変わらなく、穏やかに時は過ぎていった。長く滞在している人から聞くと実際に犯罪が増えているようだ、人の集るところに日本人はいかないようにと注意をうけた。

今回はオーストリア有数の景勝地といわれているザルツカンマングートへ旅をした。ザルツブルグの南東に広がる湖水地方、その中一つ、ザンクトウオルフガング、その湖畔に寄り添うように、窓辺に花を飾った山小屋風の家々が立ち並び、巡礼教会が町の中心に建つ、趣のある小さい町だ。

ウオルフガングからは非訪りたい湖水地方シャーフベルグ、一七三三メートルまで上る登山鉄道は機関車で客車を押し上っていくアプト式だ。サンドオブミュージックにも登場した登山鉄道だ。眼下に広がる湖水地方を見ながらゆつくり上っていくと四十分、頂上にはワスレナグサ、シナノキンバイ、キタ科の花の高山植物が咲き乱れ、なだらかな山々に囲まれた湖水地方が一望できる。どこを切り取っても絵になる美しさだ、初夏の少し肌寒いさわやかな空気の中、時のたつのも忘れる程だ。

生れ乍らの無垢な感受性



志村 栄至
(栄守改め)
(評論家)

既に記憶から薄れつつあるが、障害者施設で起こった事件では、明るい話題が先行する社会の裏面を突如、目の前にした気がした。

社会の何が、こんな論理を弄び、行動化する精神を育ててしまったのだろう、との疑念はあちこちで持ちあがったことだろう。

小林秀雄の『カラマアゾフの兄弟』（『原作と同じタイトル』）には、この事件の蔭にも見え隠れする人間の精神性、観念を考察させてくれる小径がある。

まず、前号で「主人公の憎悪と嫌忌」と、不用意に言葉を使ってしまったが、実は同著で、小林は、「憎悪」

と「嫌悪」を対比させて、極めて重要といえることを書いているので、これに触れたいと思う。

最初は、この無理矢理に創出したかのような妙な対比を、えっ？ と思っただが、やがて小林の心がこう読めた。それは、ややもすると敬遠されがちな自著を、この際、一見の読者にも親しんでもらいたいとのすこぶる人間的な心が働き、背中を押されたのではと。主人公、マイチャのこんな告白から入る。

「どうした訳か自分でも解らないが、いざといふ時、窓の傍から飛びのいて、塀の方に逃げ出していた。」
続けて、原作者の心を慮りつつこ

う書く。「君等（『小説の読者を指す』）にはマイチャを信ずる力がない、と。それはともかく、あの時、神様が自分を守って下さった、といふマイチャの言葉に偽りはないのだ。どうしてあの時、父親を殺さなかったのか、彼には解らなかつた。」

その先で、問題の言葉がこう飛び出す。「これは大変、誤り易い事なのだが、憎悪は、感情のものといふより寧ろ観念に属するものなのだ。」

これに対して、「嫌悪」をこう書いている。「マイチャにあるものは嫌悪である。彼の生れ乍らの無垢な感受性が堪へられぬ純粹な嫌悪なのである。」
ここで少し視野を広げ、小林の著作全体を概観してみると、この人の世界では観念がほとんどの場合、人間の異名として登場する。これが際立った特徴であることを心しておくのも無駄ではないらしい、と自得している。

つまり、過度に論理を尊び、頼りにする生き方は、頭脳の夢に酔い痴れることにも等しいのだ、と。

このようにも言える。善人であつても、論理とか観念に翻弄されると、どれほど滑稽で愚かな行為に走つてしまふことか。極論すれば、或る人にとつては、観念は地獄への道案内人の役割りを果たしてしまふのだと。

ここで小林がその対極に置く、「嫌悪」に光が当たたる。もちろんそれは、「生れ乍らの無垢な感受性」と言葉を使う、小林の心の奥を覗き込むことでもある。このフレーズの先に何が意識されているか、そこに思いを馳せることは、この人の文章読解の要諦とも言える。

ところが、学識が豊富であることが、多彩と判断されるらしい。しかし、敬愛する者はその文章が常に、言外に「神」が意識されつつ執筆されていること、それが味読のたびに腹の底から確信へと高まるところに、無上の喜びを感じてしまふ。

しかし、世の中には、論理とか観念の類を重要視して、それを最上位に考える人も確実に存在する。そこで再

び、この文言が脚光を浴びねばならぬ。

「自分と古人との間に親しい関係を結び、この関係を情理をつくして明瞭化する、これが（本居）宣長の古学です。」

ここでも先の「生れ乍らの無垢な感受性」に注目しなくてはならない。こんな身近から、その意識を育む、これが実は大事なのだ。すると、「古人」とか「情理をつくす」に血が通い、小林の深慮が具体へと変じる。「この有名な言葉（＝「徳」を指す）は、（中略）孔子の余程、大事な思想だったと考へて差支へあるまい。」

これは、『考へるヒントⅡ』に出て来るが、「情理をつくす」とともに「徳」も、今や風前の灯の如く消えかかっている世の中となつた。すると、あたかも皮肉の極みのように、己の論理を「神略化」して、行動に暴走する人物まで出現した。現代社会の病理とは思いたくはないが、複雑な思いが去来する。

それはともかく、出所を明かすと、「情理をつくす」は、昭和の月刊誌『諸君』が企画した、江藤淳氏の対談『歴史について』での小林の発言だ。その時の年齢（七十歳前後）が、どうしても後世に残すべきと思つたか、日頃の諸論述とは趣を異にして、読者一般に小林の方からぐっと近づいてくれた親心が感得できて、同じ対談での以下とともに、晩年期の名言と崇めてゐる。

「言葉の歴史というものは、文化の歴史の本質をなすものです。」と、したうえて、こうあるところだ。「（本居）宣長には、〈文字の賢しら〉という言葉があります。宣長には特に言霊論というものはないが、彼のいう言霊は言葉の発音にあるので、文字にはない。文字は漢字ですから。」

これも、何気なく読んで通過していつたらもつたないところだったと、後になって気づいた。各人が、それぞれの人生を完うするための秘儀がここには明滅しているからだ。

丁酉元日

山西無聞



今年の干支は丁酉（ひのととり）なので、今年も年賀状には「とり」にちなんだ五言絶句を作って送ることにした。

「酉」という漢字は、酒を醸すツボの中でもろみが盛んに発酵している状態を表した象形文字であり、これを部首にして、酒の種類・製法・製品等を表す文字ができています。部首の名は「とりへん」であるが、「鳥（とりへん）」「隹（ふるとり）」と区別して

新歳淑光暄

新歳しんさい 淑光しゆくこう 暄あたたかかく

老驥餘志存

老驥ろうき 余志よし存ぞんす

時任水邊鳥

時ときに水邊すいへんの鳥とりに任あたり

亦對梵宮言

亦また 梵宮ぼんきゆうの言げんに對たいす

「ひよみのとり」ともいう。「ひよみ」は「日読み」のことで、カレンダーのこと。この字を借りて十二支の第十位を表している。月では十月、時刻では午後六時前後、季節では仲秋、方位では西、動物ではにわとりである。「酉」の字が「ひよみのとり」として使用されたため、元の「酒」を表す文字として「サンズイ」を加えて「酒」の字が新たに創られたのである。

「鶏（にわとり）」は犬とともに太古から人間に最も身近な動物で「詩経・斉風・鶏鳴偏」に「鶏既に鳴けり、朝既に盈ちたり」と最も早くから詩に登場している。

漢詩に登場する「鶏」のイメージは「犬」とともに「平和な村里」を象徴する。陶淵明の「帰田園居・其一」には、「狗は吠ゆ 深巷の中 鶏は鳴く 桑樹の顛（いただき）」の句がある。

「鶏」にかかわる故事としては、次のようなものがある。

「鶏鳴狗盗」（戦国時代、斉の孟嘗君（もうしようくん）が秦の昭王に捕ら

えられた際に、食客の中にいた能く狗の真似をする盗人と、鶏の鳴き真似のうまい男の助けを借りて難を逃れた故事。このことからつまらない技能をもつ者をいう。）

「鶏肋」（鶏のあばら骨の肉は、美味いが肉がわずかしかないことから、捨てるには惜しいが、あまり役に立たないものたとえ。出典は三国志演義。魏の曹操が漢中を支配しようと劉備と争って苦戦したとき、曹操が「鶏肋」とつぶやいたことを、部下の楊修が伝え聞いて、撤退の準備をしたことによる。）

「木鶏」（莊子・外編に出ている強敵に対しても木彫りの鶏のように、びくともしない闘鶏のこと。なお、名横綱双葉山関が七十連勝がならず敗れた際に、安岡正篤氏に「イマダモクケイニオヨバズ」と負けたことを電報で報せた話がある。）

さて、右の五言絶句の意味であるが、起句の「新歳」は新年、年の初めのこと、「淑光」は清らかな光、「暄」

は気候、天氣が暖かいこと。

承句の「老驥」は年を取った良馬のこと、「老驥は櫪（れき、馬小屋）に伏すとも、志は千里に在り（曹操・歩出夏門行）」を踏まえる。「余志」はわずかに残っている志のこと。

転句の「水辺の鳥」は「酒」の意である。「酒」の字は分解すれば「さんずい」に「酉」である。

結句の「梵宮の言」も同様で「詩」の意である。「梵宮」は「寺」のこと、「詩」の字は「ごんべん」に「寺」である。

漢字を分解して表現する例は、たとえば「松」を「十八公」と称するなど、漢文や漢詩で時に見られることである。

新年を迎えてまた一歳老いたが、時には酒を飲み、また時には漢詩を創って希望をもってこの一年を送っていきたいと考えている。

なお、今年の詩も起句と承句、転句と結句はともに対句になっており、全対格の詩である。

ボクシング

佐川 毅彦

昔、私が小学一年の時、担任の女の先生がお話をしていて、話の中に狼がでてきた。

「だれか、狼の絵を描ける人いる」と先生はいった。

安里宏という男の子が手を上げて前にでてきて、黒板にチョークでサ・サツと一気に迫力あるタッチで狼を描いた。凄いやつがいるもんだ。私と宏の最初の出会いである。人物は人物を知る。

中学三年までに三回同じクラスになった。その間、私は何度も宏の才能を魅せられた。未来の風景を描いても割り箸で建物を作っても、トームボールやあるいは彫刻刀で版画を彫らせても、なにを作っても素晴らしかった。

書道もうまかった。それからいたずらにクラスメートの似顔絵をよく描いていた。人物の特徴をうまくとらえていて、その人の欠点をオーバーに表現して楽しんでいた。本人には見せないようにボくらに見せて、大いに笑いころがしてくれた。先生たちも犠牲になった。今思えば、かなり馬鹿にしている、やりすぎである。

私はほとんど独学で絵を描いてきた。彼と出会えた事が一番勉強になった。

中学三年の文化祭で、絵の展覧会をすることになり、美術の先生が積極的に参加を呼びかけていた。絵心のある生徒には直接参加を要望していた。

私も画用紙と絵の具を渡されて、傑作を描いてもってこいと言われてた。(この頃は私も少しは絵の才能を認められていた) 私は赤い瓦の家を荒々しく表現して出品した。美術の先生に観せると「なかなかやるじゃないか」と気に入ったようであった。当日、展覧会場に観にいくと宏の絵は二番目で、私の絵が最優秀賞であった。やった!とでもうれしかった。それから私は画家として、間違った道を歩きつづけるのである。苦節何年経っても認められない。

宏とは高校が違い、どうなったか解らん時が過ぎていった。風の便りでは、のちに甲子園で有名になった高校のボクシング部に入り、プロボクサーになったと聞いた。それか

らさらに年月が過ぎて、私が四十七歳の月曜日の昼、なにげなくつけたテレビで、ボクシングの世界戦を中継していた。外人のチャンピオンに日本人が挑戦していた。挑戦者側のコーナーにはタオルを首にかけてヒゲ面のオッサンがついていた。そのヒゲ、どこか見覚えあるような？するとアナウンサーの安里会長がどうとかと聞こえてきた。えッ！なんとこのヒゲ、あの宏ではないか……

沖縄で彼はボクシングジムを開いて、会長になっていたのである。



茗荷考

永岡 慶之助
(作家)



思いを馳せる。

我家の北西にある、あまり日当たりが良くない庭の片隅に、毎年『ミヨウガ』が、芽を出す。カラカラに乾いた地面を見て、今年も、晩夏から秋の下旬にかけての、香の物の楽しみは、味わうことができないかなあと思っていた。スーパーマーケットに行けば、ほぼ年中、どんな野菜でも売っている昨今であるが、庭で蒔や紫蘇・山椒の葉や実・ミヨウガを取ることができるとは、四季を感じられる至福の時である。

春を告げる蒔ふきの臺たいが芽を出したかと、思っていたら、足早に春が過ぎ、初夏を思わせる気温になり、山椒の若芽が若葉に変わり、葉の下に実をつけ、今年もザル一杯の実を収穫、塩漬けにし、冷凍保存とする。

その後、梅雨に入ったというが、関東地方は、なかなか雨が降らず、首都圏の水瓶である群馬の五つのダム湖の水量は、毎日減りつづけ、連日『ダム情報』をテレビ・ラジオ・新聞で流し

ていた。我家でも節水を心がけ、風呂もシャワーで済ませていた。湯舟に浸かるのを毎日、無常の楽しみとしている僕としては、非常に辛かったなあ。

今年も、熊本や、岩手、北海道といった所で、十月に入ってから鳥取で、地震・台風による被害が起こっている。どの地においても「水」の不便さを感じ、「水」の大切さを感じさせられた。一方、雨が降らず、思わず雨ごいなどをした昔の人々の苦勞にも、

少し残念に思っていたところ、八月下旬から関東地方にやって来た台風が先駆けとなり、雨が大量に降り始めた。すると、ミヨウガが、次々と頭を出し、十月中旬まで毎日のように、千切りにして、おかかをかけて醤油でいただく、または汁物に千切りしたものを乗せる、または素麺の薬味にする。卵とじや酢の物、天ぷらなどもいいが、やはり火を通さず、生のままが香りといい歯ざわりが最高だ。あのシャキシャキとした音がたまらない。なんで

も、生のまま食するのは日本だけらしい。水質の問題か？

ミヨウガを食べすぎると物忘れする
という、いい伝えがある。あるいは馬
鹿になるとも。ずいぶん言い様であ
る。

日本の民話で、自分の名前すら覚え
られない小僧が和尚に口答えをして、
和尚に折檻され死んでしまい、小僧の
墓から生えてきたのがミヨウガで、こ
れを食べると物忘れするという話にな
る。原産は東アジアらしいが、インド
の伝承話になると、釈尊の弟子に名前
を覚えられない男が、釈尊の教えを純
粋に実行し、ついには悟りを開き、そ
の墓に生えたのがミヨウガという。

僕が聞いたことのある話は、中国の
民話で、欲ばりな男が、ミヨウガがあ
まりにおいしくて、他人に分けるのが
惜しくなり、ひとり占めして食べてい
ると、食べたことも忘れてしまうとい
うような話だったような。

漢字で書くと「茗荷」となるが、仏
教では、「冥加」という言葉が『悟り』

を意味することから、ミヨウガという
植物が、悟りの神の印に用いることと
なり、この神が「摩陀羅神（曼荼羅
神）」である。

足利時代から戦国時代になると、摩
陀羅神信仰が盛んになる。争いや戦
いの明け暮れで、一族に神仏の加護
と子孫繁栄を願い、信仰と共に、家紋
に「茗荷紋」を使用する氏族がでてき
た。藤原氏系にきわめて多く、大沢・
中村・増田・堀・鍋島・野間・明楽・
松村、などという姓ならば、家紋が茗
荷紋ならば、先祖がすぐに判ると思
う。この他に清和源氏系や宇多源氏系
でも、茗荷紋を用いている家系が多い
と聞く。

日本の十大家紋の一つであるという
茗荷紋は、デザインが豊富で六十種類
以上もある。そもそも家紋は、公家階
級の衣服の文様と色別が始まりで、地
位や門地門閥の識別化と庶民との差別
化にあった。武家階級では当初、党や
家を表すものとして使われ始めたが、
戦が増え、戦場で敵味方の識別の必要

性から旗や武器・武具の他に、その陣
地を明確化するための幟や幕などに大
将の印をつけて志気を高めた。公家は
本家から一族の間に広まったものが、
公家の場合は主家から一族・郎党およ
び部下へと伝わった。

町民や農民などの庶民は、比較的平
和になった江戸時代から商人が屋号で
印を使い始め、明治八年（一八七五）
に戸籍制度を確立するため、農民・町
民に姓名を決めさせ登録したことから、
庶民も家門意識が高まった。各々
家紋もつけるようになったものこのこ
ろ。

ミヨウガをシャリシャリと食べなが
ら、我家の家紋や氏などについても考
えを巡らす。

そういえば都内の茗荷谷にも久しく
行っていない。池袋から丸ノ内線に乗
り換えるんだったかな？昔は茗荷畑
だったと云うが、江戸の人々もミヨウ
ガを味わっていたのだから。今はビル
の畑？いやいやビルの林に変貌してし
まった。

西とりの歳としの特性

山本千明

(ECC英会話講師)

「予感の中…」

そのホテルの前で私はそつと眩くらいた。

今からおよそ十二年前。仕事仕事のご主人様が珍しく連休が取れることとなり、このようにのにたまわれた。「泊二日でぶらり旅に行こう！」

あら珍しい。夫婦の会話がほとんど「業務連絡」と化していた日々に一筋の光が差した瞬間である。なんでも、広島島の尾道で映画に登場した「戦艦ヤマト」が一般公開されているとか。「少年の心」を持つ夫。まずそこを指し、あとは風の吹くまま気のむくままの自由な「ぶらり旅」を思いついたらしい。

ただ「男のロマン—ぶらり旅」で気になる事が一つだけあった。

観光そのものにさほど興味の無い私にとって「旅」の最重要スポットは「非日常」を感じさせてくれる、素敵

でサービスの良いホテル！これに尽きるのだ。

「どこのホテル予約する？」と問うと、「そんなん決めたら、ぶらり旅にならんやろ」。別に車中泊でもええし！」と、ドヤ顔で返す「トムソーヤ夫」。私は、自分の嫌悪感を表に出すことが無いように日々努力はしているつもりだ。しかし、その瞬間、余程強く眉間に皺を寄せていたに違いなし。無言の私の顔を覗き込んだ主人はそそくさとパソコンの前に座りチャカチャカと検索を始めた。数分後、「ほれ」と手渡されたものは広島のホテルリストだった。

「行つてから、よさげなところ選んで泊まろう」そこには三十件ほどの宿泊施設名がズラリ。まあこれだけあれば飛び込みでも安心かな。夫の精一杯の妥協案に、私は心の中で挙げた拳こぶしを

そつと降ろした。

眩しい夏の日差しの中、岡山から尾道へと続く軽やかな楽しい夫婦ドライブめおととして尾道に着いた私たちが目にしたもの：それは、どこまでも続く果てし無き車の大行列。

「戦艦ヤマト」人気を舐め過ぎていた。辛抱強く待つこと二時間半。ついに夫の「少年の心」がボキンと折れた。こそこそと大渋滞を抜け出し、もと来た道へとUターン。

「残念やけど：今日はもう、広島市内のホテルにチェックインしてゆっくり休むか？」待つてました！とはかりに私は例のリストをバッグからつかみ出すと上から順に電話をかけた。ところが、「申し訳ございません。今日は満室です」とアウトの連続。十件：二十件：どんどん不安が増してくる。恐るべし！「戦艦ヤマト」の集客力！

そしてリストの下から七番目。「このままだとホンマに車中泊や！」携帯を握りしめる手がじつとりと汗ばんできたそのとき、「あ~~~~シングル二

つなら空いてますけどお〜〜」というおぼちゃんの声。「それで結構ですよ！お願いします！」藁わらにも縋すがる思いで私は叫んでいた。

「あ、ここや」と夫が指さす先を見て、私は不安が現実のものとなったことを感じていた。客に向かって「空いてますけどお〜〜」と応対するおぼちゃんのホテルっていったい：が「予感的中」だったのだ。三階建ての廃墟のようなビル。剥げかけた看板。そこに誇らしげに書かれていた文字が私を絶望の淵へと導いた。

「カラーテレビ完備！」

薄暗く狭い階段を上がった先に受付とおぼしき小窓が見えた。この窓：病院のトイレで「コップはこの中に」と書かれている「検尿用」の窓に似ている：そんなことをぼんやり考えながらノックすると、パサパサ茶パーマ頭のおぼちゃんの顔が現れた。「あ〜〜ハイハイ。ここにサインして〜。シングル二つで八千円ね〜」料金は電話で聞いてはいたが：「あ、それくらい

はするよね。なんたってカラーテレビ完備だもん！」と冗談を言う気力も既に消え失せていた。「はい、これ部屋の鍵〜」渡されたキーを凝視して、さらに沈思黙考ちんしもくかうする私。部屋番号が書かれたプラスチックの札と鍵を繋ぐものーそれはよれよれの輪ゴムだった：そこへ容赦ないおぼちゃんの強めのヒトコト。「あ、部屋開ける時、気い付けんさい。それ、マスターキーやけん！」えっ?!何で?何でマスターキーを客に?!ちよつと待て!もしも他の部屋で盗難事件とかあったら：真っ先に疑われるし!ボーゼン自失のまま、先に歩き出した主人の後をついて行つた。隣合わせの部屋の前で不自然な笑みを浮かべた夫が囁く。「先に部屋を選んでええよ。僕はどっちでもいいから」と、引きつりまくりの私を見かねて最大限の優しさを見せる「ぶらり旅の総責任者」だったが：選ぶまでもなく、二つの部屋はどちらも等しく「悪夢」と呼ぶに相応ふさわしい状態だった。得も言われぬよどんだ空気とカビ

の臭い。エアコンはあちこちガムテープで「修繕」されている。カーペットには所々、得体のしれないシミがこびりついていた。シャワーの真下に無理やり「置かれた」古いバスタブが一つ。そして部屋の隅には一いち手垢てあかのついた「カラーテレビ」が一台、鎮座ちんざされていた。

別の意味での「非現実」を涙、涙、そしてまた涙、で味わつた「ぶらり旅」であつた。

三月生まれのご主人様はこの春、めでたく定年を迎えられる。仕事潰けだつた多忙な日々から「お疲れさま」と申し上げたい。「一緒にゆつたりと北海道にでも行く?」とさりげなく持ち掛けてみる。

彼は遠くを見る目をして真顔でこう述べられた。

「それもええな〜。レンタカーでも借りて行こう。北海道ぶらり旅！」

「酉年生まれ」のこのおっちゃん。「三步前に歩くと全て忘れる」幸せな特性を持つていらつしやるようだ。